

鴻巣市自治会長研修会

東日本大震災に学ぶ 避難所運営の実態 自助・共助（近助）の力

令和6年2月17日（土）

防災士 菊池 健一

主な内容

- 若林区避難所周辺の被害状況等
- 地震発生から避難所までの行動
- 避難所開設と運営
- 避難所生活での悩みや不安
- 女性への配慮に欠けた一例
- 避難所生活を阻害したもの
- 震災対応で得た教訓 等

基本動作は出来たか?!

震度7

1. 身を守る ▲
2. 火の始末 ×
3. 出口の確保 ▲
4. 隣近所の安否確認 ○
5. 家族への連絡 ×

















仙台新港

東部道路

仙台東IC

七郷中学校

大沼

へりポイント

荒浜小学校

荒浜

荒浜地域



荒浜小学校

荒浜地域

ヘリポート

仙台若林JCT

仙台東部道路

仙台東IC

七郷中学校

六郷小

七郷小学校

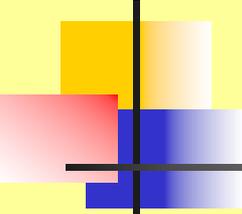
蒲町小学校

蒲町中学校

霞目飛行場

避難状況

- 荒浜小学校 約380名 荒浜住民等・へりにより全員救助
- 七郷小学校 約3,000名 周辺地域住民、荒浜住民等
- 七郷中学校 約700名 周辺地域住民、荒浜住民等
- 蒲町小学校 約1,500名 周辺地域住民、荒浜住民等
- 蒲町中学校 約900名 周辺地域住民、荒浜住民等



地震発生から避難所までの行動

(かすみ町地域⇒蒲町小学校)

かすみ町地域（海岸から約5.5km）

- 14:46 **地震発生** 自宅及び近隣の被害状況を確認
- 14:55 自衛隊ヘリ・県警ヘリ偵察離陸 確認
- 15:10 町内会の被害状況を確認
（自主避難を促す）
- 15:20 **県警ヘリから津波警報・避難指示**
再度各町内会をまわり避難を促す
- **15:40 大津波 襲来**
- 15:40 1520に声を掛けた高齢者の方々がまだ自宅
- 17:00 町内会の約6割が避難
町内の約4割は自宅等で避難

仙台市若林区避難所 CASE-1 避難を促しても応じない老婆

震災直後、避難所まで一人で歩けそうもない一人暮らしの高齢者の方が近所の方々の手を借りてワゴン車で避難しようとしていましたが、**高齢者の方は避難を拒み**、なおかつ避難させようと支援している住民に対し**「玄関の鍵」を探させたり**、散乱したタンスから**「通帳と印鑑」などを探させたり**していました。避難を手伝っていた住民は、早く避難をしたいのですが、高齢者の方を独り置いて避難する事も出来ずにいました。

(※その後も、頻繁に震度3以上の余震が続いていました。)

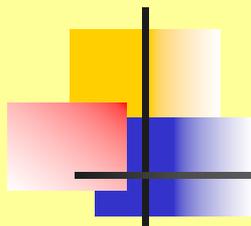
CASE-1 避難を促しても応じない老婆

【対応策】

- ① 避難をさせる事を最優先に考え、**毅然とした態度と口調**で指示
- ② 高齢者の自宅の被害状況から玄関の鍵を掛けてもどこからでも侵入出来る旨、更には余震が続きまた大きな地震が来る可能性がある事を説明・納得させるとともに、**夜は自警団を編成**して見回りをする事で安心させ避難に応じさせた。

【理由】

- ① **人命第一**（余震が続き、津波の可能性大、いち早い避難が必要）
- ② 電気・水道・ガス等のライフラインが止まっている中での高齢者の独り暮らしは難しいと判断
- ③ **避難を支援する住民の二次災害防止**

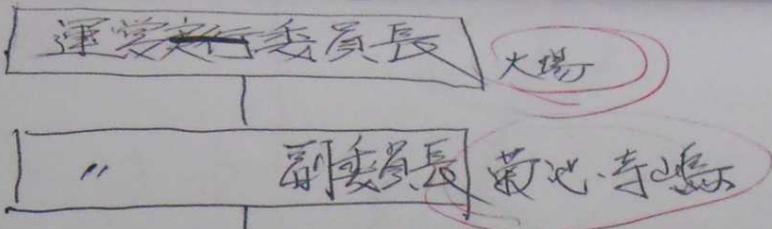


避難所開設と運営

避難所開設までの流れ

- ・17:00 避難者約1,200名強（**人員の掌握取れず**）
 - ・22:00 自警団を編成 各町内会巡視（**22:00~06:00**）
 - ・23:00 各町内会長及び学校長へ避難所運営組織を立ち上げたい旨を相談し協力を要請
（会議に提示する**簡易組織図**を手書き作成）
-
- ・08:00 各町内会長、学校長等で会議（趣旨説明、役員の決定）
（**※防災アドバイザーの立場で支援**）
 - ・10:00 組織に沿った活動を開始
 - ・19:00 役員が活動しやすい様に避難者を集め、役員の紹介と協力依頼

炊王



運営委員
各町内会長

(役割)
 ○ 資料の
 管理
 ○ 記録の
 管理
 若林 俊彦
 三浦 洋平
 ○ 行政
 全般

4 (2/1)

本部

各町内会

任 務
 総務
 ○ 会費の
 徴収
 ○ 町内会との
 連絡
 ○ 広報
 ○ 事務

2

炊事班

各町内会

任 務
 朝・昼・夜の
 炊事
 ○ 常備品の
 管理
 ○ 水の
 確保

衛生班

各町内会

任 務
 ・ 公衆衛生の
 維持
 (体育館、野外の
 清掃、10-11)
 ・ 消毒

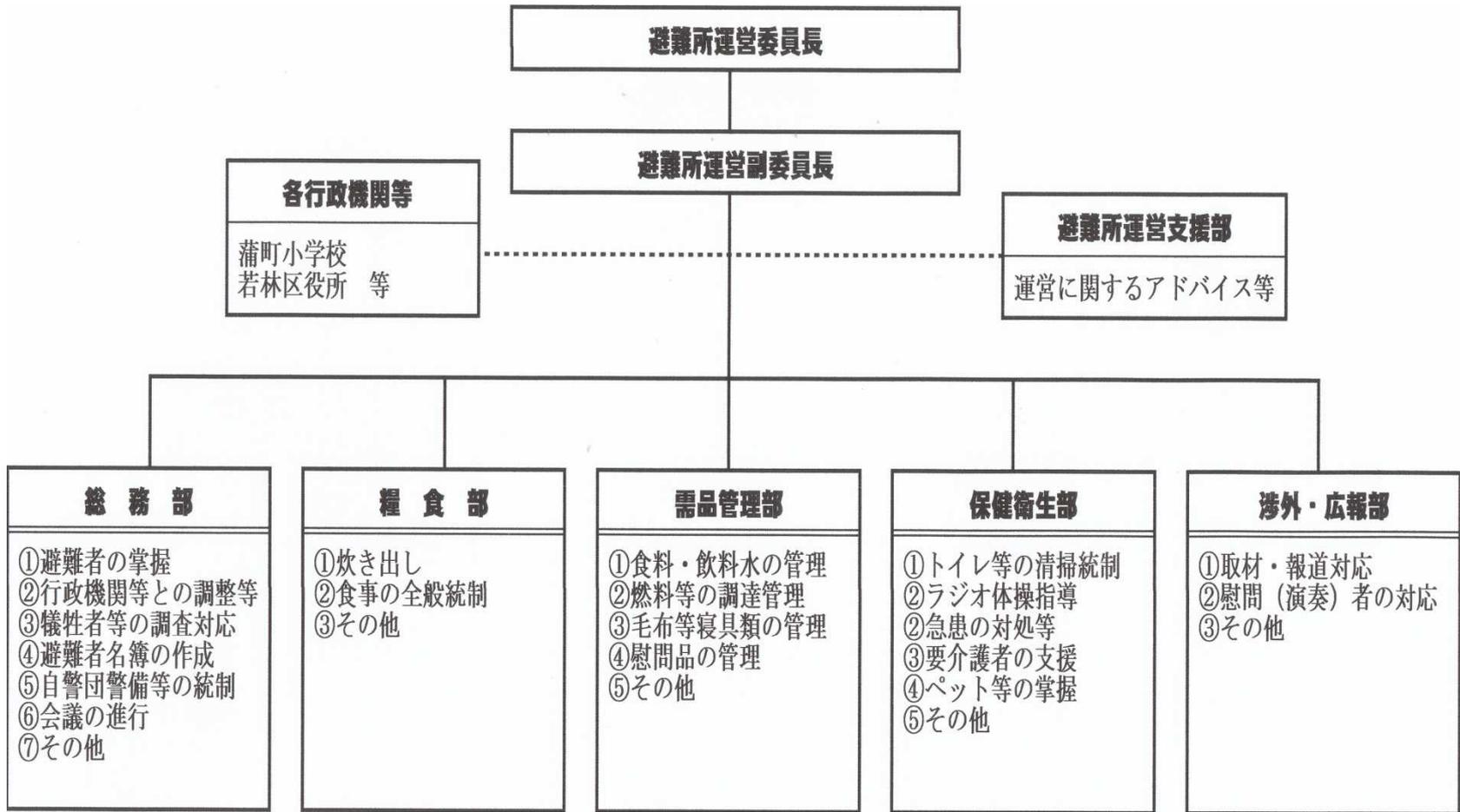
疫

○ 消毒
 ○ 体育館の
 清掃

1. 下草班 (町内会)

下草班

炊事班



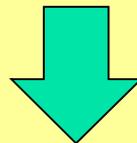
避難所立ち上げの考え方

【避難所内の状況】

1. 高齢者や女性が多い
2. 知らない人ばかり(暗いイメージ)
3. 避難者の不安が多い
4. 避難所生活の長期化が予想された

コミュニティを最優先

日頃から顔の知られている町内会長等をメインとした組織



- ① 人員の掌握及び協力受けが容易
- ② 情報・伝達等の迅速化の期待
- ③ 日頃の町内活動等の貢献で信頼度が高い
- ④ 避難者個々の不安の軽減（町内会毎の区割り）

お知らせ

当避難所における給食は、
福島原発の放射能漏出事故
の影響で糧食の補給が十分
になりつつあります。

水・電気の復旧ができた方は、

自力で復興していただきたく
ご協力をお願い致します。

尚、自力での復興が困難な方は
運営本部までご一報下さい。

運営本部

ステ-ジ

248%
273%

120%

12

震国 カサキ 中印	東柳 83 中印
背丸 上草井	藤田 左丁助

河田東 カサキ中印 38	新報知 x3
荒迄	存在

10

藤田 新報知	新井 39
新報知	新井
新報知	新井

新報知 50	新報知 80%
新報知	新報知

WG
↓





仙台市若林区避難所 CASE-2 避難所にペットを連れ込む

一部の避難者の中には、子犬などのペットを連れ込んでいる人がおり、ペットを連れていない避難者から「**ペットは体育館の中に入れて欲しくない。**」との苦情があった。

ペットを飼っている人に外につないで欲しい旨を話したら「室内犬なので今まで外で飼った事が無く、雪が降っている外では可愛そうだ。」とのこと…。

当時、室内犬を連れて避難した方が8家族ほどいた。

CASE-2. 避難所にペットを連れ込む

【対応策】

- ① 施設管理者（小学校長）へ依頼し、学校の空き教室（工作室）をペットの家族用として提供して頂く様に交渉し確保した。
- ② ペットを連れた8家族は、全てその「工作室」に入ってもらい、その部屋の「班長」を決めて頂いて、朝・夕の情報伝達の時間に体育館に来て貰う様にした。
- ③ ペットの糞尿の確実な始末及びエサ等の準備は飼主の責任で実施

【理由】

悲惨な状況下でのペットの存在は、飼い主にとって安心と癒やしのひとつと判断した。

仙台市若林区避難所 CASE-3

突然大声で「早く電気を消せ！」

避難所生活から約10日ほど経過した夜8時頃、いつもの様に避難所運営スタッフが連絡事項等を伝えている最中、80歳位のおじいちゃんが突然大きな声で「いつまでグタグタ話しているんだ？早く電気を消して寝ろ！」と大声で怒鳴りました。

一緒に避難していた家族も突然の怒鳴り声にビックリした様子で、その奥さんと思われるおばあちゃんが「少し我慢しなさい！」と、そのおじいちゃんの頭を叩きながら運営スタッフに「どうもすみません！」と謝っていました。

話を聞くと、おじいちゃんは**自宅ではいつも夜7時頃に寝ていた**そうです。

当時、**避難所の消灯は夜10時**と定められておりました。

CASE-3. 突然大声で「早く電気を消せ！」

【対応策】

- ① 状況を受け確認した際、**自宅で夜8時前に寝る高齢者が多い**事がわかり、**子供の走る足音や電気の明るさでストレスが溜まっている**事がわかりました。
- ② 近隣にあるコミュニティーセンターを臨時避難所として借り上げ**大変な高齢者(付き添え含む)**のみコミュニティーセンター（畳部屋）で避難生活をしてもらう様に移動してもらいました。

【理由】

- ① 指定避難所での**避難生活の長期化**が予想された。
- ② 体育館は人の出入りが多いため、すきま風が入りやすく床冷えがあることなどから**高齢者の健康状態に配慮**した。

仙台市若林区避難所 CASE-4 指定避難所はお祭り騒ぎ

指定避難所に避難して約1週間程度経った頃から、様々なボランティア団体の慰問演奏（歌謡ショー・コーラス・手品・楽器演奏など）が多くなった。

はじめは一日1回程度の慰問演奏だったが、1週間ほど経過した頃には、**多い時に午前2回、午後2回、夜1回と朝から晩まで避難所の中はお祭り騒ぎの状態の時もあった。**

ある時、避難していた高齢者から「**ゆっくりくつろぐ時間が無い。慰問して貰うのは有り難いけど断ること出来ないのか。**」との意見が出された。

当時、社協のボランティアセンターが機能を果たしておらず、**直接、避難所との調整**で受け入れていた。

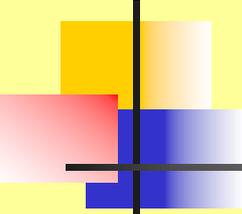
CASE-4. 指定避難所はお祭り騒ぎ

【対応策】

- ① 「**大阪**から来ました。」「**福岡**から来ました。」という遠方からの慰問団体が多かった事もあり、運営側スタッフは「**わざわざ私達のために遠くから来て頂いた。**」との気持ちで全て受け入れていた事が分かった。
- ② 慰問団体の受け入れは、**原則ボランティアセンターを通じて調整**して貰い、最大午前1回、午後1回を基準とし夜は受け入れない事とした。

【理由】

- ① くつろぎや会話が出来る時間帯の確保
- ② 正式窓口を通じた受け入れと指揮系統の活用



避難所生活での悩みや不満

- ① 老若男女さまざまな人が雑魚寝状態
- ② 着替える場所がない、または少ない
- ③ 人と違うものを食べにくい
- ④ 他人のいびきや子供が騒ぐのが気になる
- ⑤ 自分が好きな時に寝ることが出来ない
- ⑥ 家族での経済的な会話がしにくい
- ⑦ 精神疾患、その他の病気の方も一緒
- ⑧ 仮設トイレがいつも混んでいて汚い
- ⑨ ペットを連れている方も一緒 など

女性への配慮に欠けた一例

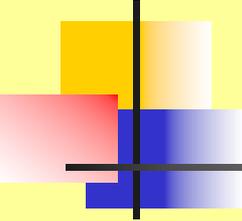
1. 間仕切りを設置して欲しいという人がいるのに男性リーダーが「みんな家族だから必要ない！」と強い口調で言われ最後まで設置されなかった。
2. 赤ちゃんに授乳する場所がなく壁に向かって授乳
3. 生理用品を男性担当者から「はい！」と言って皆の前で手渡された。
4. 女性専用の物干し場が無く、下着を干すと盗まれる可能性もあるので生乾きのまま着替えた。

女性の視点から意見を言える 女性防災リーダーが必要

避難所での最低限の安心・安全の確保
(特に女性への配慮は必要不可欠)

災害リスクの高い方の生活上の配慮など

話し合いの場に
女性の積極的な参加



避難所運営を阻害したもの

① 情報の不足

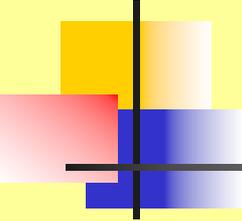
(避難者の不安が増す。デマが飛び交う。)

② 燃料の不足

(避難所暖房燃料、避難所運用車両ガソリンなど)

③ 通信手段の不全

(電話、防災無線等が通じない。情報の共有ができない。)



震災後の地域との 連携の強化と成果



要援護者の避難に役立てたい

「悲劇二度と」 車いすに願い

仙台市若林区かすみ町の防災士菊池健一さん(59)が、地元の七郷地区の町内会に車いすを配備する活動に取り組んでいる。災害時に狭い場所を通れる車いすの利点を生かし、高齢者や障害者ら要援護者の避難に役立ててもらおう。東日本大震災では多くの要援護者が犠牲になっており、菊池さんは「悲劇を防ぎたい」と訴え、支援を呼び掛けている。

取り組みの第一弾として4月22日、かすみ町中部町内会に車いす1台を届けた。菊池さんの防災士仲間が役員を務める松山市の義足製作会社「オルツ本田」が趣旨に賛同し、贈呈した。

同町内会の吉田敏男会長

仙台の防災士・菊池さん

(65)は「この地域は高齢化が進み、車いすは役に立つ。集会所に置いて防災訓練で使いたい」と感謝の言葉を述べた。

菊池さんは元自衛隊員。2007年春の退官と同時に防災士の活動を始め、市内の町内会や企業向けに講話を行っている。震災では自宅が半壊し、地元の蒲町小で避難所の運営に携わった。民生委員も務める。

震災時、家族や介護施設職員らの車で避難しようとした要援護者の中には、道路が渋滞したため車に乗ったまま津波に流され、犠牲になる人が多くいた。

「車いすなら狭い道を通れるし、道路が混んでも素早く避難できる。各町内会が数台ずつ備えておけば便利だ」と思い立った菊池さん。昨年9月、インターネットの交流サイト「フェイスブック」や講話を通じ、協力の呼び掛けを始めた。

これまでにオルツ本田のほか、熊本市の健康食品販売会社、東北福祉大(仙台市)や神戸学院大(神戸市)などによる「社会貢献学会」が支援を申し出ているという。

七郷地区には約20の町内会があり、菊池さんは「全町内会が車いすを備えるまで活動を続けたい」と話している。

連絡先は菊池さん0222(2)38024。

七郷の全町内会配備目指す 支援呼び掛け



車いすを贈られたかすみ町中部町内会の吉田会長(左)と菊池さん

内作業」について「掘り出し物」だけでなく、人の出入り

立入禁止



40m







震災対応で得た教訓

- ① 行政、町内会、民生委員等との連携の強化
(指揮系統を通じた行政と地域との情報の共有など)
- ② 地域、行政、学校との積極的な訓練の実施
(早朝・夜間・避難所運営訓練など)
- ③ 顔の見える隣組みとの更なる関係づくり
(町内会行事などへの参加・挨拶・声かけなど)
近所付き合い ⇒ 近助付き合い

鴻巣市自治会長研修会

東日本大震災に学ぶ 避難所運営の実態 自助・共助（近助）の力

End

令和6年2月17日（土）

防災士 菊池 健一